

(No. 6)

事例名	コーデ騎士団（こーでないとだん）
地域	東京都世田谷区
実施主体	コーデ騎士団（代表 児玉健太郎）
活動要約	定年退職した世代による各種相談事業、カフェバーなどを通じ地域の問題解決に取り組む
主な分野	「学習」・「趣味」・「世代間交流」・「各種相談」
主な関係者	会員：13名（定年退職世代、男性が多い）
キーワード	ワンコインカフェバー／出前相談／地域問題解決／団地高齢者／孤独死

■活動のきっかけ・経緯

- ・平成20年度、世田谷区生涯現役推進課主催の「ひと・まち塾」で、団塊世代の社会回帰のための地域コーディネータ養成講座（1年間）を修了。メンバー30名は30代～70代で、3チームで、各10カ所の地域NPOなどをまわった。その後、下北沢チームの10人が地域相談コーナー開設を決めた。
- ・拠点はCOS下北沢で、紙芝居、パソコン教室、落語、音楽、タッピング療法、古代魚の話（お魚博士として有名だった末広恭雄先生の娘さん）、お寺の話など多岐にわたる。
- ・当初は来客を待っていたが、それだけでは人が集まらないので、こちらから「出前講座」をしかけた。出前講座先は、区内の公営団地の自治会（65カ所）に絞った。
- ・当初は、各団地にDMを出したが、コーデ騎士団という名称で怪しまれたのか、ほとんど反応なし。区が管理をひきついでいる100世帯以下の中小団地50カ所に、世田谷トラストまちづくり経由で案内を出したら、反応があった。
- ・本格的な活動は平成23年度からスタートしている。

■主な活動内容

●参加費など

- ・会費は年間1,000円、ワンコインバーは1回500円（ドリンク・フードつき）。会員13名。
- ・運営は無償ボランティア。外部ゲストには交通費実費を出す程度。
- ・初年度立ち上げのみ世田谷区社会福祉協議会からの助成を受けた。

●ワンコインバー

- ・平成22年度からスタート。ドリンクと軽食に、パフォーマンスやミニ講演をかませている。

●紙芝居

- ・小川正徳さんが担当。若いころから趣味で小説を書いていた。定年後も文章を書いていたが、「世田谷かみしばい」を立ち上げる。絵を描く人、声優などすべて分業体制。団員は8歳～80歳と多様。
- ・世田谷にちなんだ話も創作（竹久夢二が世田谷にいた頃、多摩川にアユが戻ってきた話など）。
- ・社協の助成も受けている。

●パソコン教室

- ・岡崎宏さん（大手コンピュータ会社出身）が指導。年賀状作成や会計帳簿の付け方など、PCはすべて持ち込み。こちらからの出前講座も多い。

●コーデ騎士無料塾

- ・中高の算数を無料で教えている。



<ワンコインバー>



<小川さん（左）とパソコン教室の岡崎さん>

■今後の取組み

- ・周辺団地で出前講座を行っていて、団地独居老人の孤独死が大きな問題として浮かび上がってきた。
- ・プライバシー保護の名目で、どこに誰が住んでいるのか実態がわからない（要介護・要支援高齢者以外の独居高齢者は、民生委員も把握していない）。高齢者の所在すらわからない状況である。
- ・立川の大山団地自治会（事例 No.11）が、すべての団地住民の基本情報（氏名、性別、年齢、ペット、車、家族構成、連絡先など）について、自前の「住民基本台帳」をつくって自主的に管理しているという話に触発され、今後、同様の活動を始めたい。
- ・平成 24 年度からは、周辺団地と協力して同様の活動を展開していきたい。当面は、団地自治会役員を大山団地につれてゆくことから始める予定。
- ・コーデ騎士（ないと）団の目的は、地域の課題発見と解決であり、最初からやる事が決まっていたわけではない。平成 24 年度から新しい活動ステージに入ることになるだろう。

連絡先	コーデ騎士団（代表：児玉健太郎） 住所：東京都下北沢 2-39-6 COS 下北沢 電話番号：03-3481-5340 http://setagaya-coordinats.jimdo.com/
-----	--

(No. 7)

事例名	神戸定住外国人支援センター（KFC）
地域	兵庫県神戸市
実施主体	NPO 神戸定住外国人支援センター（理事長 金 宣吉）
活動要約	神戸における在日外国人の生活支援事業などを展開
主な分野	「介護・ケア」・「子育て」・「食事会」・「学習」・「世代間交流」・「居場所」・「多文化交流」
主な関係者	利用者：在日コリアン、定住外国人、中国残留邦人（家族）
キーワード	在日コリアン／被災外国人／阪神大震災／中国残留孤児／介護／高齢者生活支援／子育て支援／日本語教室／多文化共生

■活動のきっかけ・経緯

- ・1995年の阪神大震災後、被災したベトナム人を支援する「被災ベトナム人救援連絡会」と、神奈川県国際交流協会や神戸で活動する在日コリアンを支援する団体が設立した「兵庫県定住外国人生活復興センター」が前身である。
- ・1997年2月、両者が統合され、長田に「神戸定住外国人支援センター」（KFC）が発足した。
- ・被災者（在日コリアン）が震災後の仮設住宅から受け皿住宅へシフトしてゆく中、心身の虚弱化や認知症がすすみ、日本語が話せない、文化的に日本人高齢者の集いに馴染めない高齢者が増えてきているといわれた。実態は、日本食があわない、母国語を話したいというニーズが背景にあることがわかった。
- ・1998年、米国の日系移民社会の動向調査でサンフランシスコに行き、「KIMOCHIKAI」が文化的背景に配慮したランチサービスをやっていることを知った。
- ・1999年、在日コリアン高齢者にもそのような「居場所」が必要であると実感し、長田の勤労市民センターの料理教室を週1回かりて、一緒に母国の料理等を作って食事会をはじめた。最盛期には40人くらいのオモニ（おかあさん、在日コリアン1世）が集まってきたものの、参加者の高齢化が進み、参加人数が減ってきた。
- ・公的介護保険のデイサービスに形を変え継続できないかと考えた。それがハナの会のはじまりである¹。

■主な活動

- ・定住外国人の職業・生活相談
- ・日本語学習教室（韓国語、ベトナム語、中国語、ポルトガル語、スペイン語他）
- ・在日外国人児童の学習支援
- ・在日外国人の起業支援
- ・KFCハナの会：デイサービスセンター、食事会、イベント



¹ 在日コリアンは国民年金がもらえない。公的介護保険制度は、「国籍条項」がない数少ない社会保障制度である。

ト、コミュニケーションサポーター派遣

●中国残留邦人の生活支援

- ・中国残留邦人は、神戸近辺だけでも家族を含めて500人くらいいる。
- ・2011年6月、KFC 帰国者新長田交流会をスタートさせた。
- ・コミュニティが「切断」されているので、わざわざ電車に乗ってKFCにやってくる人もいる。

●グループホーム（開設予定）

- ・都市に流入した「無縁社会の居場所づくり」と考えている。

■今後の展望

金理事長は、今後の活動について以下のように語る。

●東日本大震災被災者の支援

- ・福島の子供たちをひとりでも救いたい。夏休み疎開させるなどニーズに合った支援をしたい。
- ・福島の被災者は、従前のコミュニティを失い、疎開せざるを得ない状態。疎開先では、「マイノリティ」であり、我々がおかれた状況と合い通じるものがある。
- ・新しい住地、定着地の中で、コミュニティをいかにして再構築してゆくのか、について、なにか手助けしたい。
- ・それには、マイノリティの視点が不可欠であり、中間団体によるサポートも必要と考える。

●多文化共生モデルの構築

- ・多様性を前提とした対応が必要。多文化化が進展する中、これまでKFCがやってきたことは特殊なことではないと思う。



連絡先	NPO 神戸定住外国人支援センター（理事長 金 宣吉） 住所；兵庫県神戸市長田区若松町 4-4-10 アスタクエスタ北棟 502 電話：078-612-2402 メール：kfc@social-b.net URL: http://www.social-b.net/kfc
-----	---

(No. 8)

事例名	京都コリアン生活センター エルファ ²
地域	京都府京都市
実施主体	NPO法人京都コリアン生活センター エルファ（理事長 鄭 禧淳）
活動要約	京都における在日コリアンをはじめとする外国籍住民のための高齢者・障がい者・子育て支援事業
主な分野	「介護(ケア)」・「子育て」・「学習」・「研修」「世代間交流」・「居場所」・「多文化交流」
主な関係者	スタッフ：89名（バイリンガルの在日コリアンが主、うち1割が日本人） 介護保険利用者：約160名（平均年齢85歳、在日コリアンが主）
キーワード	在日コリアン／中国残留孤児／介護／ヘルパー養成／生活支援／子育て支援／多文化交流

■活動のきっかけ・経緯

従来から、現在の理事長が、京都市内の同胞（在日コリアン）の生活相談にたずさわっていた³。2000年の公的介護保険導入に向けて、ヘルパー2級養成を目指すところから動きが始まった。

- ・1998年 8人の在日2世が、「ウリ（私たちの）介護研究会」発足。同胞ヘルパー養成にとりくむ。
在日一世の方々が2000年の公的介護保険をスムーズに利用できないことが想定された。過去に社会保障の分野では、「国籍条項」がネックになっていた。
- ・1999年 エルファが訪問介護施設の認定を受ける。
- ・2000年 公的介護保険による訪問介護事業スタート。ヘルパー2級養成講座開始。
- ・2001年 NPO法人京都コリアン生活センターエルファを設立。

■活動内容

●活動の種類：

- ①介護事業：訪問介護、居宅介護支援、通所介護
- ②障がい者支援事業
- ③高齢者・障がい者生活支援事業（ネットワーク活動）
- ④子育て支援事業
- ⑤多文化交流事業

エルファの介護事業の特色としては、①母語でのコミュニケーション②母国の食べなれた食事(キムチなど)③母国での歌や遊び④故郷に帰った気持ちになれる空間、があげられる。

●組織の概要

- ・スタッフ：89名は殆どがバイリンガル（日本語・ハングル）。朝鮮学校出身者が多い。そのうち、デイサービスのスタッフは32名で日本人は6名

² エルファとは、嬉しい時や楽しい時に発せられる感嘆詞。

³ 京都市内には、約2万6千人の在日コリアンがいる。その内65歳以上は約4000人

- ・利用者：160名、平均年齢85歳。これまでの延べ利用者数約600名。



●地域の（日本人向け）デイサービスを利用されていた在日コリアン高齢者の事例

- ・施設で唱歌を歌い出すと「おれ(女性も男言葉を使う)、そんな歌知らん」とすねたように繰り返すハルモニ(おばあさん)。
- ・朝鮮語なまりの日本語を話すとバカにされるからと、施設では一言も発せず「失語症」や「聾啞者」と勘違いされていたハルモニ。
- ・習字や俳句が始まると、就学経験がないため寂しそうにその場を立ち去る在日1世もいた。
- ・日本占領下、ハンコ一つで故郷の土地を奪われた事がトラウマとなり、押印を拒んで介護サービスを受けられなかったハラボジ(おじいさん)など。

●エルファの意義と最近の傾向

- ・制度的無年金のため生活保護受給者で独居高齢者が多いが、外部から数多くの来訪者が来ることで、エルファが社会と利用者の接点になっている。交流は彼らの生きる意欲へとつながっている。
- ・就学経験がなく、ただ食べるため、子を育てるためだけに生きてきた在日1世たちが経験できなかった事を体験する場となっている。
- ・1世の男性は、過酷な労働とアルコール依存で短命の傾向にある。概して封建的で女性の集まりを避ける傾向もあったが、2世利用者層が増えるにつれ男性が増加傾向にある。中には習字や手品を教える男性もいる。
- ・自己主張することでデイサービスの居場所を失った日本人高齢者が新たな利用者として登場している(エルファを利用している日本人高齢者は4名)。
- ・就労のため韓国から渡日したニューカマーも新たな1世として利用者に加わる。

■課題

- ・利用者層が1世から2世へ、そして新たな1世、日本人高齢者の登場…と多様化している。
- ・中国の残留孤児1世が介護を受ける世代になった。日本に住む歴史的経緯は全く違うが、彼らが抱えている問題は在日コリアンと重なる部分が多く、他の団体とともに支援活動を行っている。今後多文化を意識したソーシャルワークの必要性が更に重要となる。

連絡先	NPO 法人京都コリアン生活センターエルファ（理事長：鄭 禧淳） 住所：京都市南区東九条北松ノ木町12 電話番号：075-693-2550 メール：info@lfa-kyoto.org URL：http://lfa-kyoto.org/
-----	--

(No. 9)

事例名	ふれあい住宅
地域	北海道音更町
実施主体	音更町役場
活動要約	単身高齢者と若者がふれあい交流をはかりながら共同生活する住宅
主な分野	「住まい」・「世代間交流」
主な関係者	単身女性高齢者：16名 福祉短大学生（女子）：16名
キーワード	ふれあい住宅／世代間交流／独居高齢者／「ゆるやかなつながり」

■活動のきっかけ・経緯

- ・音更町の高齢化率 23%（平成 22 年）は、全国的に見てとりわけ高い水準ではないが、一人暮らし高齢者（特に女性）が増加する中、孤立せずに安心して住み続けられる住宅へのニーズが高まっていた。
- ・介護保険の開始を受けて介護福祉科が新設された大谷短期大学が帯広から移転してきたこともあり、高齢者の孤独感の解消を図ると共に、若者も高齢者の知識や経験を習得できる共同生活の場として、当時の金子町長により発案された。
- ・音更町が事業主体となり、1990 年～1996 年まで 4 棟の集合住宅「ふれあい住宅」を建設（90 年 1 棟、92 年 1 棟、96 年 2 棟）した。

■事業の概要

- ・高齢者が住む 1 階部分は建設省補助の公営住宅として、若者が住む 2 階部分は町単独事業として福祉課が担当。
- ・1 棟は、お風呂や台所が完備された 4 戸の高齢者住宅と 4 戸の若者住宅、共用の玄関とコモンスペースで構成されている（家賃 高齢者住宅 12,000 円～15,000 円 若者住宅 20,000 円～25,000 円）。



- ・高齢者住宅は、原則的に町内居住の概ね 60 歳以上の単身女性で、公営住宅入居基準に適合し、自立して日常生活を営む事のできる人を公募し、住宅の趣旨にあった人を面接により選び出す。
- ・若者住宅は、大谷短期大学が社会福祉学科の新入学生から抽選で決めていたが、現在は栄養学科など他学科にも条件を緩和している。
- ・住宅の運営は、各棟の入居者に一任されているが、学生の入学時期と卒業時期に、4 棟合同の顔合わせ会とお別れ会が役場主催で開催されている。
- ・1 階部分は高齢者住宅入居者の管理範囲で、コモンスペースの管理（9 時～17 時までストーブをつけ

ておく、掃除など)は、1ヶ月ごとの輪番制で行っている。

■入居者のプロフィールとコメント

●高齢入居者

<Eさん> 60代女性、2011年5月入居

- ・近くの温泉地で8年間、仲居さんとして住み込みで働いていた。
- ・身体(腰)を壊して離職せざるえない状況に陥り、緊急に安い家賃で入れる住居を探さねばならなくなり役場に相談。
- ・普通の公営住宅に入居を決めかけた時に、役所の担当からふれあい住宅をすすめられて入居。
- ・学生さんとの交流などを目的に入居した訳ではないが、ちょっとしたことでも、なにか聞かれたり(ボイラーのつけ方やBBQの炭のおこし方など)、頼まれたり(帰省時の宅急便対応)すると嬉しい気持ちになる。学生さんにはもっと頼って欲しい。
- ・直接の行き来はなくても、2階の物音が聞こえたり、逆に数日間、聞こえなかつたりすると安心したり心配したりする
- ・テレビなどで出てくる最近のカタカナ用語の意味を学生さんに聞いてみたいと思ったりするが、恥ずかしいのと居るのかわからないので聞けない。

<Iさん> 70代女性、入居5年目

- ・スーパーで25年間働いた後に定年退職。
- ・帯広でアパート暮らしをしていたが、年金では家賃の支払いが大変になり、安価なところ(ふれあい住宅)があると聞いて役場に相談。
- ・ちょうど空きがあり、見に行き即決したが、当時はふれあい住宅の趣旨を詳しく知らなかった。
- ・学生さんと一緒に聞いても、別に嫌ではなかった。
- ・入居した5年前にはボタン付けを頼んできた学生さんもいたが、今の子は遠慮しすぎる。
- ・学生さんが雪かきを手伝ってくれる。
- ・アパートでは誰とも話さなかったが、今はちょっと一声かけたり、話すようになって良かった。

<Kさん> 70代女性 入居4年目

- ・子育ての環境を考え東京から離農跡地に移住し、25年間、音更から40~50kmにある南更別で牛を飼っていた(好きな国文学の本を読む暇も無い生活のなかでも、ボランティアを少ししていた)。
- ・手伝ってくれていた息子の大学進学を機に、牛飼いを辞めることを決意。
- ・最寄の公共交通まで6kmあり、車の運転ができなくなっても生活できる場所への転居を考え、帯広や音更の公営住宅を申し込んだが外れるなかで、偶然にふれあい住宅に空きがでて決めた。
(音更を希望したのは、通院先の病院があったのと、牛飼いを辞めて時間ができたら大谷短大で異文化理解などの聴講生になりたいという想いがあったから)
- ・ふれあい住宅については、ニュースで見入居前から知っていた。
- ・膝や腰のリハビリに通いつつ、入居後に新たに始めた活動(大谷短大に聴講生として通学、源氏・万葉集の会、盲聾者の為の音訳の会でのボランティア)で毎日忙しい。
- ・身体が弱ってふれあい住宅を退去せねばならなくなったら、農協の介護付き住宅への入居を考えて

いる。

<Zさん> 70代女性 入居3年目

- ・夫が退職後に帯広で居酒屋をしていたが、その夫は認知症になり亡くなった。
- ・自宅はあったが、股関節の手術をし、一人暮らしは心配、と息子が町営住宅を探してくれるなかでふれあい住宅を知った。
- ・息子が全て手配をしてくれ、退院後すぐに入居したが、病院を出たり入ったりの状況が続いている。
(最近、ふれあい住宅での生活のおかげか、だいぶ落ち着いてきている)
- ・杖を使いながらの生活で、食事の準備などは自分でするものの、週2回ヘルパーが来ている。
- ・部屋にすることが多く、月単位でまわってくるコモンスペースの掃除当番は他の入居者が手伝ってくれている。

●若者入居者

Oさん(介護福祉1年、網走出身)、Mさん(介護福祉1年、中標津出身)、Kさん(栄養2年、青森出身)は、高齢者との生活について以下のように語った。

- ・入居前は、高齢者が1階に住んでいるアパートという認識程度であったが、玄関が同じであることやコモンスペースがあることを入居して初めて知って驚いた。
- ・住宅内での役割分担はないが、玄関の雪かきはしている。
- ・コモンスペースは、ストーブがあつて暖かいので、テレビを観たり、冬休みなどに勉強をしたりしているが、あえて高齢者と話しに出てくるなどは無い。
- ・入居当初は、お店の場所や住宅内のボイラーなど、色々と教えてもらった。
- ・同級生に「ふれあい住宅に住んでいる」と言うと、驚かれることが多い。



<高齢者と若者の入居者>

■当初の事業趣旨と現状の差

- ・安い家賃、探していた時に偶然空きが出たなど、学生とのふれあいを目的に入居した人はいない。
- ・高齢者住宅入居者同士では、菜園(希望者は使える)で採れた野菜やお菓子のやり取り、コモン

- ペースの掃除当番などの助け合いが行われているが、基本は個々が自分のペースで生活している。
- ・学生の側も、高齢者とのふれあいを目的とした住宅という認識はなく、今も特に意識していない。
 - ・他住棟との交流はほとんどない。
 - ・コモンスペースで一緒に食事をするなど、入居者が主体的に交流することはほぼ皆無。
 - ・しかし、顔をあわせれば挨拶をする、部屋の物音でほっとするなど、お互いが空気のように存在し、そこに安心や喜びが生まれている。行政の意図とは異なる「ゆるやかなつながり」が成り立っている。

■課題と展望

音更町役場の担当者は、ふれあい住宅の意義づけ、今後の展望について以下の点を指摘する。

- ・入居を希望する高齢者は、若者を世話する位の意識を持って住んでもらいたい。
- ・入居している学生さんに地元の人はおらず、親は安心して一人暮らしさせられる場と思っている。
- ・卒業してからも、定期的に訪ねてきてくる若者もいる。
- ・1990年の建設当時、多くの取材や他自治体などから見学を受けたが、実際にこのような共同住宅を建設したという事例はきかない。福祉系の学部のある大学などが近くにあるなど、条件が揃わないと難しいことが原因ではないか。
- ・現段階の需要を満たしたと考えており、町としては今後、新設の計画はないという。
- ・音更町では男性の一人暮らしは多くなく、シニア男性を対象とした住宅建設なども考えていない。

連絡先	音更町保健福祉部地域包括支援センター 住所；北海道河東郡音更町元町2番地 電話：0155-42-2111
-----	--

(No. 10)

事例名	那須100年コミュニティ（「ゆいま～る那須」）
地域	栃木県・那須町
実施主体	㈱コミュニティネット
活動要約	高齢者の自立と共生を実現する持続可能なコミュニティ
主な分野	「住まい」、「趣味」、「憩い」、「介護・ケア」
主な関係者	スタッフ：ハウス長（1名）、生活コーディネータ（5名）他 入居契約状況：49世帯（内訳：60歳以上のシングル女性が大半）
キーワード	「100年コミュニティ」／自立と共生／サービス付き高齢者向け住宅／地域プロデューサー／ハウス長

■事業内容

●那須100年コミュニティ

- ・㈱コミュニティネットは社団法人コミュニティネットワーク協会の提唱する「世代、健康状態、生活の価値観が異なる様々な人が集い、お互いの生活を尊重しながら、3世代にわたって継承・維持していく“100年コミュニティ”」の拠点の場づくりを実践している。
- ・重点をおいている社会問題の中で「急速な高齢化」「過疎化」への取り組みの中、北海道から沖縄まで全国を調査した結果、2007年、別荘地で高齢化が進む那須が浮かび上がってきた。
- ・2008年には、「地域プロデューサー」が同地に住み込み、現地の生活環境、関連施設の立地状況、周囲の人的資源のポテンシャル等をリサーチしニーズ調査した結果、同地に新たなコミュニティの拠点を創ることをきめた。
- ・㈱コミュニティネットの代表とスタッフの中には、これまでさまざまなモデルの有料老人ホームを30カ所近く手がけてきた経験があり、社会と関わりながら、元気なときから人生の最期(完成期)を迎えるまでコミュニティの中で安心して暮らせる地域づくりの一つとして、高齢者の「自立と共生」を支援する住まいづくりに注力しはじめた。
- ・一方、自分たち（入居者）が働いて、一部を管理費にあてるというワーカーズコレクティブの発想も当初から意識されていた。
- ・同協会の近山恵子理事長は、入居一時金1,000万円、年金12万円で暮らすということを目標に設定、これをテーマとしたセミナーは毎回注目を集め、関心の高い社会問題の一つとして受けとめられた。
- ・中庭を囲んだ5ユニットで形成されたハウスは、2010年11月に1ユニット18世帯が開設、第1次入居を開始し、2012年1月15日には全てのユニットが完成し、総戸数70世帯がフルオープンした（総事業費11億円）。取材時点で49世帯が成約していた。
- ・入居者の7割は、シングル女性。
- ・地元の八溝杉を使用した天然木のコテージ風の建物が、ゆるやかな雑木林の中に配置されている。
- ・居室面積は33～66平米、入居時費用は家賃の一括前払い金として1,137万～2,451万円、月額費用は、共益費8,000円/月、サポート費が一人で30,000円/月、二人で49,000円/月、食費は別途必要である。

- ・共用スペースは、各ユニットに共用棟が併設していて、食堂、音楽室、図書室、自由室、ゲストルームなどがある。
- ・通院や買い物のために、1日2～3回の送迎車（マイクロバス）が運行している。
- ・国交省の旧高齢者居住安定化モデル事業に選定され、先進的モデル住宅として訪問者も多く、入居者が案内役を務めるなど、ハウス全体でいい刺激になっている。



<ゆいまーる那須のパノラマ>

●東日本大震災時に一時疎開

- ・3月11日の東日本大震災では、一部設備に被害が出た程度であった。しかし、たび重なる余震や計画停電、原発からの放射能汚染の可能性などを総合的に考慮し、3月15日から2週間、入居者およびスタッフ全員が、神戸にある系列の「ゆいま～る伊川谷」に、一時疎開をした。
- ・受け入れ先のゆいま～る伊川谷では、那須からの住民を温かく受け入れ、阪神大震災の時の体験談、食事会、ハンドマッサージや音楽会等が催された。

■入居者のプロフィールと感想

<Kさん>70代、女性

- ・岩手県で母の介護をしていたが、やがて亡くなり一人住まい。「松原淳子さんの1人暮らしで大丈夫」の本をよんで那須プロジェクトのことを知った。
- ・1,000万円の入居金、月々3.8万円の管理・共益費は魅力的であった。
- ・東日本大震災を体験し、1人暮らしの心細さ、不安が大きくコミュニティのある場所で暮らしたい思いが強くなった。
- ・身内は、こちらに移り住むことを反対したが、自分で現地を下見した。
- ・こちらにきてからは、パッチワークなどを行っている。何か社会の役に立てないかと思い、ワーカーズコレクティブに参加し、地産地消で有機野菜を使った週3回の給食サービスに参加。
- ・食事は皆さんと一緒にすることが多い。お互い支えあって楽しく暮らしていきたい。
- ・楽しいと思うのは、窓からカーテン越しに朝日が部屋に差し込んでくる時や冬の景色を見る時。白鷺やトンビも飛んでくる。
- ・入居後は、こちらを訪問した親戚も安心していたようだ。
- ・いろいろなことをつくり上げていく楽しみがある。

<Mさん>60代、女性

- ・茨城県に住んでいて、小さいときから自然があって山がある地域にあこがれていた。
- ・友人からテレビで那須のことが出ていと教えてもらい、テレビ局に電話し、セミナーに参加。セミナーの中で那須の話があったので、2日後には現地を見学し、林も気に入った。
- ・住み心地はいい。近くの牧場の牛がかわいい。
- ・ワーカーズコレクティブでは、クッキーや漬けものを教えてもらう。
- ・去年の震災の時は、2週間、神戸の「ゆいま〜る伊川谷」にスタッフとともに疎開していた。先方の入居者や地域の方々が親切にして下さり、とてもありがたかった。

<Uさん>60代女性

- ・秋田出身で、保育士を経験。ぬいぐるみやピアノ、スキーが趣味。近山理事長の人柄にひかれた部分も大きい。
- ・小規模多機能居宅介護（デイサービス・ショートステイ）は、早く実現してほしい。



<鍋を囲んで夕食風景>



<薪ストーブが気に入ってます>



<図書室>



<食堂>



<入居者とスタッフとペットたち>

■今後の展望と課題

- ・フルオープンから2カ月、今後、残りの入居者が移り住んでくる。自立した暮らしを志向する入居者同士のコミュニティ形成が本格化するのこれからである。
- ・今後、10年～30年という中長期的視点に立った場合、入居者の高齢化に対応できるサービスの展開、さらには、若年世代を含む地域住民との交流がキーとなる。

連絡先	(株)コミュニティネット ゆいま～る那須 住所：栃木県那須郡那須町大字豊原乙 627-115 電話番号：0120-817-287 http://www.yui-nasu.net/ (ゆいま～る那須) http://www.c-net.jp/index.html (株)コミュニティネット) http://www.conet.or.jp/ (コミュニティネットワーク協会)
-----	---